

機関番号：12611  
 研究種目：基盤研究（B）  
 研究期間：2008～2010  
 課題番号：20330132  
 研究課題名（和文） 暴力シーンに関する内容分析と縦断調査に基づくメディア教育プログラムの開発と評価  
 研究課題名（英文） The development and evaluation of a media education program based on content analysis and longitudinal surveys on violent scenes

研究代表者 坂元 章（SAKAMOTO AKIRA）  
 お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・教授  
 研究者番号：00205759

研究成果の概要（和文）：本研究は、内容分析と縦断調査によって子どもたちが実際に接触しているテレビ番組やテレビゲームから影響のある暴力的描写の文脈的特徴を抽出し、その特徴に関するメディア・リテラシー教育プログラムを作成することを目的としていた。分析と調査の結果、影響がある要素として暴力の被害描写が抽出され、被害描写を用いたプログラムを作成した。学校での準実験の結果、このプログラムによって被害描写の理解が進むことが示された。

研究成果の概要（英文）：The purposes of this research project were (a) to conduct content analysis and longitudinal surveys to find the contextual traits of violent portrayals which could affect children's aggressiveness from television programs and videogame software they were actually exposed to and (b) to develop the program of media literacy education concerning the contextual traits. As results of the analysis and surveys, how to portray injured victims was regarded as an influential contextual trait, and an educational program in which the portrayals of victims were used was made. The result of quasi-experiment conducted in a school showed that this program could deepen children's understanding of portrayals of victims.

#### 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	4,200,000	1,260,000	6,370,000
2009年度	5,900,000	1,770,000	7,670,000
2010年度	4,900,000	1,470,000	5,460,000
総計	15,000,000	4,500,000	19,500,000

研究分野：社会心理学

科研費の分科・細目：社会心理学

キーワード：テレビ、テレビゲーム、暴力シーン、教育プログラム、メディア理解

#### 1. 研究開始当初の背景

今日のようなメディア社会では、メディアなしの生活は考えられないほど子どもたちの日常生活に浸透している。メディア接触が子どもたちに及ぼす影響については、テレビ番組やテレビゲームの暴力描写への接触が児童青少年の攻撃性を高める場合があることが報告されてきている。ただし、メディアの暴力描写は、視聴する暴力描写の内容（文

脈）によっては攻撃性を高めるよりも低める場合があり（例えば、暴力行為の描写の後、暴力行為が被害者や被害者の周囲の人々にいかに深刻な被害を及ぼすかを描くなど）、今後、規制のような形で子どもたちから暴力描写を遠ざけるよりもむしろ教材として利用していくことにより、子どもたちがメディアの暴力描写を適切に読み解く力（メディア・リテラシー）を高めていくことができる

と考えられる。

本研究テーマの基礎研究として、研究代表者らは、平成15年度より科学研究費基盤研究(A)の助成を受け、世界的に高く評価されている米国テレビ暴力研究(National Television Violence Study, 以下 NTVS)を踏まえて、日本におけるテレビ番組の暴力描写および向社会的行為描写の内容分析と、テレビ番組の暴力描写視聴と攻撃性の因果関係を検討するために小中学生への縦断調査を実施してきた(Japanese Television Violence Study; 以下 JTVS)。JTVSの成果として、日本のテレビ番組の特徴や、攻撃性が促進される暴力行為の文脈的特徴、抑制される暴力行為の具体的な文脈的特徴が示唆されている。今後、これらのテレビ番組の暴力行為の文脈的特徴をより詳しく検討することによって、教材として映像の読み解きの授業に利用できる可能性があると考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究では、JTVSの内容分析、縦断調査の手法に基づき、小中学生が実際に接触したテレビ番組やテレビゲームの文脈的特徴やその影響についてさらに詳細な検討おこなうこと、また、それらの分析結果に基づいて、小中学生がテレビ番組の暴力描写等の文脈的特徴を読み取る力を高めるための教育プログラムの開発を行うことを目的としていた。

## 3. 研究の方法

まず、小中学生がよく視聴、接触しているテレビ番組やテレビゲームを対象にした暴力描写の内容分析と、小中学生の攻撃性や暴力の規範意識を測定した縦断調査を行い、それらの結果を合わせて分析することで、小中学生に影響を及ぼす暴力の文脈的特徴を抽出した。次に、抽出された文脈的特徴をもとに、テレビ番組の暴力描写の文脈的特徴を読み取る力を高めるための教育プログラムを作成した。最後に、作成したプログラムの効果を測定するため、中学生を対象とした準実験を実施した。

## 4. 研究成果

本研究プロジェクトは、(1)テレビ視聴の影響、(2)テレビゲーム接触の影響、(3)教育プログラムの効果、それぞれについて検討した3つの研究と、テレビゲーム利用に対する保護者の介入についての調査研究の、計4つの研究から構成されていた。以下では、この4つの研究それぞれの成果について報告する。

### (1)テレビ視聴の影響の検討

#### ①目的

テレビ視聴が小・中学生の攻撃性や攻撃に対する規範意識にどのような影響を及ぼすのかを検討することを目的としていた。実際に児童生徒が視聴していた番組を内容分析し、そこに含まれる暴力描写の文脈的特徴を抽出し、それらを視聴したことがどのような影響を及ぼすのかを検討した。

#### ②縦断調査の方法

11校の小学校、12校の中学校の小、中学生を対象に実施した。2009年2~3月に、小学4、5年生、中学1年生を対象に1回目調査を実施した。続いて、2009年10月~2010年3月に同じ児童、生徒を対象として2回目の調査を実施した。2回に渡る調査の協力者は、小学生1351名(男子684名、女子664名、性別不明3名)と中学生1394名(男子720名、女子672名、性別不明2名)であった。1回目調査では、攻撃性(身体的攻撃、言語的攻撃、間接的攻撃)、攻撃に対する規範意識(身体的攻撃、言語的攻撃、間接的攻撃)、社会的望ましさ等についてたずねた。また、2009年2月12日から18日までの1週間、18時から24時までに視聴したテレビ番組について調査した。さらに、1ヶ月間のテレビ視聴について、攻撃的なシーンをどの程度視聴したかをたずねた。2回目調査では、1回目調査と同様に、攻撃性(身体的攻撃、言語的攻撃、間接的攻撃)、攻撃に対する規範意識(身体的攻撃、言語的攻撃、間接的攻撃)等についてたずねた。

#### ③内容分析の方法

1回目調査の回答結果をもとに、小・中学生の視聴率の高い番組(視聴率4%以上)を抽出し、内容分析を行った。テレビ番組は、同一の番組でも放送回によって内容が異なることから、視聴率のデータ収集した前後1週間ずつの番組を合わせて分析し、特定の週の内容による偏りを無くすよう努めた。具体的には、2009年2月5日から25日までの3週間に放送された番組が分析の対象となり、視聴率4%以上であった326番組を評定した。そのうち、暴力行為を含む110番組について、暴力行為の被害結果や暴力への報酬などを評定した。評定作業は、事前に研修を受けた大学生・大学院生29名が分担した。

#### ④暴力的なシーン視聴の影響

攻撃的なシーンの視聴が児童生徒の攻撃性や攻撃に対する規範意識に及ぼす影響について検討した。テレビでは、殴る、けるなどの身体的攻撃だけでなく、言葉で相手に精神的に苦痛を与える言語的攻撃や、悪い噂を流すなど直接的ではない方法で相手に精神的苦痛を与える間接的攻撃が含まれる場合もあることから、これら3種類の攻撃のシーン別に影響の検討を行った。小学生では、言語的攻撃のシーンの視聴が言語的攻撃性に影響を及ぼしていた( $\beta=.08, p<.01$ )。また、

中学生では、身体的攻撃シーンの視聴が言語的攻撃性や間接的攻撃性に及ぼす影響や（順に、 $\beta=.04, p<.10$ ;  $\beta=.08, p<.01$ ）、言語的攻撃のシーンの視聴が言語的攻撃性に影響を及ぼす傾向などがみられた（ $\beta=.05, p<.10$ ）。また、規範意識への影響として、身体的攻撃のシーンの視聴が身体的攻撃へ規範意識（ $\beta=.06, p<.05$ ）、言語的攻撃シーンへの規範意識（ $\beta=.07, p<.01$ ）、間接的攻撃への規範意識（ $\beta=.08, p<.01$ ）に及ぼす影響がみられた。また、言語的攻撃のシーンの視聴や間接的攻撃のシーンの視聴が間接的攻撃へ規範意識に及ぼす影響がみられた（共に  $\beta=.07, p<.05$ ）。いずれの影響力も大きなものではないが、言語的攻撃シーンの視聴が言語的攻撃性や身体的攻撃への規範意識に影響を及ぼすだけでなく、異種の攻撃性や規範意識にも影響を及ぼすことが明らかになった。

#### ⑤暴力描写の文脈的特徴視聴の影響

被害や苦痛などの暴力の結果を描くことは、暴力行為の学習を抑制すると考えられている（e.g., Baron, 1971）。また、被害の程度をよりリアルに描くことで、暴力行為の学習が抑制されると考えられている（Smith et al., 1998）。分析の結果、小学生の女子において、番組の中で描かれる被害の結果が、現実に想定されるよりも軽度に描かれていることが、身体的攻撃性（ $\beta=.09, p<.05$ ）、言語的攻撃性（ $\beta=.08, p<.10$ ）、間接的攻撃性（ $\beta=.07, p<.10$ ）に影響を及ぼしていることが明らかになった。また、中学生の男子において、間接的攻撃に対する規範意識に影響を及ぼす傾向があることが明らかになった（ $\beta=.08, p<.10$ ）。いずれも影響力は大きくないものの、仮説と同方向の影響を示している。

一般に、報酬が与えられた暴力や、罰せられない暴力は、攻撃的な態度や行動の学習を促進させるといわれている（Smith et al., 1998）。分析の結果、小学生の女子において、物理的な報酬が与えられたり、罰が与えられないことが、身体的攻撃性（順に、 $\beta=.07, p<.10$ ;  $\beta=.08, p<.05$ ）、言語的攻撃性（順に、 $\beta=.09, p<.05$ ;  $\beta=.10, p<.05$ ）、間接的攻撃性（後者のみ  $\beta=.09, p<.05$ ）に影響を及ぼしていることが明らかになった。また、中学生の男子において、物理的な報酬が身体的攻撃に対する規範意識（ $\beta=.08, p<.05$ ）に影響し、罰が与えられないことが、間接的攻撃に対する規範意識に影響することが明らかになった（ $\beta=.11, p<.01$ ）。いずれも影響力は大きくないものの、仮説に沿った結果であるといえる。一方、小学生男子や中学生女子にはそのような影響はみられなかった。

## (2)テレビゲーム接触の影響の検討

### ①目的

テレビゲームソフトの暴力描写に接触す

ることで小・中学生の攻撃性や暴力に対する規範意識にどのような影響が出るのか検討することを目的としていた。子どもたちが実際に遊んだテレビゲームソフトの暴力的描写を内容分析により抽出し、それぞれの描写特徴によってどのような影響があるのか検討した。

### ②縦断調査の方法

小学校9校、中学校12校の小、中学生を対象に実施した。2009年2～3月に、小学4、5年生、中学1年生を対象に1回目調査を実施した。続いて、2009年10月～2010年1月に同じ児童・生徒を対象として2回目の調査を実施した。2回に渡る調査の協力者は、小学生1147名（男子574名、女子570名、不明3名）、中学生1215名（男子624名、女子591名）であった。1回目調査では、調査時点で販売数が多かったテレビゲームソフトから実際に遊んだことのあるテレビゲームソフトを選ばせるとともに、攻撃性（身体的攻撃性、言語的攻撃性、間接的攻撃性）、暴力に対する規範意識（身体的攻撃、言語的攻撃、間接的攻撃それぞれに対する規範意識）、社会的望ましさ等についてたずねた。2回目調査では、1回目調査と同様に、攻撃性、規範意識等についてたずねた。

### ③内容分析の方法

子どもたちが実際によく遊んだゲームソフトの描写を検討するため、1回目調査の回答結果にもとづき、人気の高い65本のソフトを分析対象とした。分析はテレビ番組の分析手続きをテレビゲームに応用して実施した。暴力的な内容が含まれているゲームソフトについては、最初の暴力行為があった時点から10分間の描写を分析することとした。また、ゲーム開始から2時間、あるいはゲーム終了時点までに暴力行為が出てこないソフトについては、暴力描写なしと判断した。暴力的内容を含むソフトは、65本中27本あり、それらのソフトの被害描写や報酬などを評定した。評定作業は、事前に研修を受けた女子大学生10名が分担した。

### ④暴力的なテレビゲーム利用の影響

テレビゲームでは従来激しい身体的攻撃のシーンや流血シーンなどの暴力描写が問題視されており、現在、このような暴力的な内容を含む程度によってレーティング制度により推奨年齢区分を示すマークがソフトにつけられるようになっている。そこで、暴力的なテレビゲームの接触の影響を検討するに当たり、本研究ではこのソフトの推奨年齢区分によって、小、中学生の攻撃性、暴力に対する規範意識への影響がどのように異なるのかについて検討を行うこととした。小学生では、どの区分のソフトの接触頻度によっても影響が見られなかった。中学生では、全年齢向けのソフトの接触頻度によって、男

子中学生において間接的攻撃性が影響を受けていた ( $\beta=.08, p<.05$ )。また、15歳以上を対象にしたソフトの接触頻度によっては、男子中学生において間接的攻撃性、言語的攻撃性、身体的攻撃に対する規範意識、間接的攻撃に対する規範意識が影響を受けていた (順に、 $\beta=.09, p<.05, \beta=.07, p<.05, \beta=.12, p<.01, \beta=.08, p<.05$ )。以上のことから、こうした推奨年齢区分はテレビゲームの攻撃性や規範意識の影響を避ける目的で利用できる可能性が示唆された。

#### ⑤暴力描写の文脈的特徴への接触の影響

被害の描写による影響について検討したところ、小学生では影響が見られなかった。中学生では、特に中学生男子において、被害を現実よりも軽く描かれる場合には、身体的攻撃性や間接的攻撃性を高め、身体的攻撃に対する規範意識や間接的攻撃に対する規範意識を低下させることが示唆された ( $\beta=.08, p<.05, \beta=.13, p<.001, \beta=.12, p<.01, \beta=.10, p<.01$ )。被害の描写は被害の程度がより現実的に描かれていることで暴力行為の学習が抑制されると考えられており (Smith et al., 1998)。今回の結果はこの傾向と一致するものと考えられる。

報酬の描写については、小学生の女子において物的報酬描写の接触により身体的攻撃性が高まる一方で、自己賞賛の描写に接触することで言語的攻撃に対する規範意識が高くなっていた (順に、 $\beta=.07, p<.05, \beta=.10, p<.01$ )。中学生では、中学生全体において自己による賞賛描写の接触と他者からの賞賛描写の接触によって間接的攻撃性が高まり (順に、 $\beta=.06, p<.05, \beta=.05, p<.05$ )、身体的攻撃に対する規範意識が低下する傾向や ( $\beta=.06, p<.05, \beta=.07, p<.05$ )、間接的攻撃に対する規範意識の低下する傾向 ( $\beta=.07, p<.05, \beta=.07, p<.05$ ) も見られた。中学生の男子においても、攻撃性、規範意識の両方に影響が見られた。具体的には、攻撃性については他者からの賞賛の描写によって、間接的攻撃が高まる影響が見られ ( $\beta=.08, p<.05$ )、また、規範意識については、自己賞賛描写と他者からの賞賛描写、物的報酬描写の接触によって、身体的攻撃性に対する規範意識が低下し (順に、 $\beta=.10, p<.01, \beta=.12, p<.01, \beta=.08, p<.05$ )、間接的攻撃性に対する規範意識も自己賞賛描写と他者からの賞賛描写の接触によって低下する影響が見られた ( $\beta=.09, p<.05, \beta=.10, p<.05$ )。報酬の描写は、攻撃性を促進し、規範意識を低下させる影響がある文脈的特徴とされている (Smith et al., 1998)。規範意識については仮説を支持しない影響結果も一部で得られたが、攻撃性に対する影響については一貫してこの傾向と一致する結果が見られた。

### (3)暴力映像を用いた教育的プログラムの効果検討

#### ①目的

テレビやテレビゲームの暴力描写による影響を検討した結果、被害描写が非現実的に描かれていることにより児童生徒の攻撃性や規範意識に影響が出ることが示された。このことは被害がリアルに描かれているものに接触し、現実には起こりうる被害に対する認識を強めることで攻撃性が低下する場合もあるとした先行研究の知見と一致していた。そこで、本研究では、中学生を対象として、テレビ番組の暴力描写における被害結果 (被害者の被害描写の有無、被害の程度など) の描写の特徴を学ぶ授業を行い、被害描写への理解が生徒の共感性、暴力に対する規範意識を高め、攻撃性を低下させる効果が見られるのかどうかを検討した。

#### ②方法

茨城県内の私立の高等学校1校の協力を得て、中学校3年生3クラスの生徒を対象として実験を行った (133名：男子60名、女子73名)。

実験計画は、1要因3水準の被験者間計画である (実験条件：①映像解説あり・映像分析あり条件、②映像解説あり・映像分析なし条件、③統制条件 (映像視聴のみ [解説・分析なし])。本研究では、テレビ番組の暴力描写における被害結果の描写の特徴を学ぶ方法として、暴力を含む映像を視聴し、その映像中の被害結果の描写の特徴を教員が解説する (映像解説あり) 方法、被害結果の描写を見て生徒自身がその特徴を分析する方法 (内容分析体験) を用いることとし、映像解説、映像分析の有無によって、上記のように、授業の方法について3条件を設定した。

実験で使用した映像は、JTVSの内容分析研究の分析対象の映像の中から、身体的被害描写があり、学校生活の中で起こったり、目撃したりすることがあり得る身体的な暴力の描写を含むテレビドラマの映像を2本抽出した。

授業の効果を検討するため、事前、事後で、共感性、暴力への規範意識、攻撃性を測定した。また、事前調査では、日常的なテレビの暴力描写への接触量についても測定した。いずれの実験条件においても、協力校の同じ情報教員が教材となる暴力描写を含むテレビドラマの映像、暴力描写の特徴を説明するパワーポイント資料を用いて映像視聴の授業を実施した。解説あり・映像分析あり条件では、1)事前調査、2)テレビドラマの映像例の視聴、3)2)の映像の解説、4)テレビドラマの映像視聴、5)テレビドラマのシーンの分析、6)事後調査、7)授業のまとめの順に授業を行った。解説あり・映像分析なし条件では、1)事前調査、2)テレビドラマの映像例の視聴、

3)2)の映像の解説、4)テレビドラマの映像視聴、5)事後調査、6)テレビドラマのシーンの分析、7)授業のまとめの順に授業を行った。統制条件では、1)事前調査、2)テレビドラマの映像例の視聴、3)テレビドラマの映像視聴、4)事後調査、5)映像の解説、6)テレビドラマのシーンの分析、7)授業のまとめの順に授業を行った。

### ③結果

分散分析の結果、共感性について実験条件間に傾向差が見られ ( $F(2,124)=2.36, p<.10$ )、解説あり・映像分析あり条件での共感性の伸びが最も大きかった。また、分かりやすさの点では、解説あり・映像分析あり条件が統制条件よりも有意に高かった ( $F(2,125)=4.24, p<.05$ )。実際に被害描写の具体的な映像を見せ、解説や分析を行うことで被害描写に対する具体的な理解が進み、共感性への影響も見られるようになるのではないかと考えられる。

### (4)テレビゲーム利用に対する保護者の対応についての調査

テレビゲームの内容分析と縦断調査の結果から、テレビゲームの推奨年齢区分や文脈的特徴に焦点を当てた介入を行うことが、テレビゲーム接触による児童、生徒の攻撃性や規範意識に及ぼす影響を抑える上で重要であることが示唆された。この結果を受けて、実際に家庭で子どものテレビゲーム利用に対して保護者がどのような介入を行っているのかについて調べるため、3歳から高校生の保護者1000人を対象にweb調査を実施した。調査の結果、テレビゲームの暴力描写に子供が接触することに対しては、否定的な保護者が多かったが、暴力の内容制限や暴力的内容について話し合ったり考えさせたりすることは保護者の約30%、レーティング利用は保護者の約10%しか行っていなかった。以上のことから、今後は保護者による内容制限のための手段としてのレーティングの利用や、学校での暴力描写に関する教育指導などにより内容により焦点を当てた介入を進める必要があることが示された。

### (5)参考文献

Baron, R. A. 1971 Aggression as a function of magnitude of victim's pain cues, level of prior anger arousal, and aggressor-victim similarity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 17, pp.236-243.  
Smith, S. L, Wilson, B. J., Kunkel, D., Linz, D., Potter, J., Colvin, C. M., & Donnerstein, E. 1998 Violence in television programming overall: University of California, Santa Barbara study. In M. Seawall (Ed.), *National television violence study*, Vol.3.

Thousand Oaks, CA: Sage Publications. pp.5-220.

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① Horiuchi, Y., Sado, M., Suzuki, K., Hasegawa, M., Sakamoto, A., Isshiki, N., Hattori, H., Linz, D., Smith, S. L., & Donnerstein, E. Content analysis of violence appearing in Japanese news programs: Its characteristic features compared to the real world and other TV genres. *Japanese Journal of Applied Psychology*, 査読有, 2009, 34(special edition), pp.15-20.
- ② Suzuki, K., Sado, M., Hasegawa, M., Horiuchi, Y., & Sakamoto, A. Television violence and aggression: The long-term effects of watching rewards, punishment, sorrow of people around victim, and victim's endurance of harm. *Japanese Journal of Applied Psychology*, 査読有, 2009, 34(special edition), pp.82-91.
- ③ 鈴木佳苗, 佐渡真紀子, 堀内由樹子, 長谷川真里, 坂元章, 中学生のテレビゲーム使用と攻撃性—暴力描写視聴の影響および認知的熟慮性による調整効果の検討—, *デジタルゲーム学研究*, 査読有, 2009, 3(1), pp. 27-38.

[学会発表] (計10件)

- ① Suzuki, K., Sado, M., Horiuchi, Y., Hasegawa, M., & Sakamoto, A. The long-term effects of television violence and moderating role of cognitive reflection. The 9th Annual Hawaii International Conference on Education, 2011年1月6日, Honolulu, Hawaii, USA.
- ② 堀内由樹子・田島祥・鈴木佳苗・渋谷明子・坂元章, テレビゲーム利用による攻撃性・規範意識への影響(1)—中学生の縦断調査データに対するレーティング区分ごとの分析—, 日本社会心理学会第51回大会, 2010年9月18日, 広島大学
- ③ Suzuki, K., Sado, M., Horiuchi, Y., Hasegawa, M., & Sakamoto, A. Contexts of TV violence and aggression: A three-wave panel survey of junior high school students. The 8th Annual Hawaii International Conference on Education, 2010年1月8日, Honolulu, Hawaii, USA.
- ④ Suzuki, K., Sado, M., Horiuchi, Y.,

- Hasegawa, M., & Sakamoto, A. Effects of frequent viewing of violent depictions in TV programs on normative beliefs about aggression: A panel survey on elementary school students. The 10th Annual Conference of the Society for Personality and Social Psychology, 2009年2月6日, Tampa, Florida, USA.
- ⑤ Suzuki, K., Sado, M., Horiuchi, Y., Hasegawa, M., & Sakamoto, A. Understanding the effects of different perpetrators of TV violence on normative beliefs about aggression for media education: A panel survey of elementary school students. The 7th Annual Hawaii International Conference on Education, 2009年1月5日, Honolulu, Hawaii, USA.
- ⑥ Suzuki, K., Sado, M., Horiuchi, Y., Hasegawa, M., & Sakamoto, A. The effects of viewing frequency for violent depictions in TV programs on negative attitude toward aggression: A panel survey on junior high school students. The 18th World Meeting of International Society for Research on Aggression, 2008年7月12日, Budapest, Hungary.
- ⑦ Horiuchi, Y., Minamisawa, U., Shibuya, A., Suzuki, K., Sakamoto, A., Linz, D., Smith, S. L., & Donnerstein, E. Analysis of violent content in Japanese video games. The 18th World Meeting of International Society for Research on Aggression, 2008年7月10日, Budapest, Hungary.
- ⑧ Tajima, S., Suzuki, K., Sado, M., Hasegawa, M., Horiuchi, Y., Linz, D., Smith, S. L., & Donnerstein, E. Contextual features of violence depiction in television advertisings. The 18th World Meeting of International Society for Research on Aggression, 2008年7月10日, Budapest, Hungary
- ⑨ Sakamoto, A., Minamisawa, U., Horiuchi, Y., Shibuya, A., Suzuki, K., Sado, M., Hasegawa, M., Tajima, S., Smith, S., Linz, D., & Donnerstein, E. The amount and characteristics of violence scenes in Japanese Television and video games. The 18th World Meeting of International Society for Research on Aggression, 2008年7月9日, Budapest, Hungary.
- ⑩ Suzuki, K., Sakamoto, A., & Sado, M.

The effects of viewing frequency for violent depictions in video games on aggression and negative attitude toward aggression: A panel survey on junior high school students. The 20th Annual Convention of Association for Psychological Science, 2008年5月25日, Chicago, Illinois, USA.

〔図書〕(計 1 件)

鈴木 佳苗、誠信書房、相川充・高井次郎(編著)「展望 現代の社会心理学2 コミュニケーションと対人関係」、2010、pp.37~58.

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

坂元 章 (SAKAMOTO AKIRA)

お茶の水女子大学・大学院・人間文化創成科学研究科・教授

研究者番号：00205759

### (2)研究分担者

菅原 ますみ (SUGAWARA MASUMI)

お茶の水女子大学・大学院・人間文化創成科学研究科・教授

研究者番号：20211302

鈴木 佳苗 (SUZUKI KANAÉ)

筑波大学・大学院・図書館情報メディア研究科・准教授

研究者番号：60334570

長谷川 真里 (HASEGAWA MARI)

横浜市立大学・国際総合科学部・准教授

研究者番号：10376973